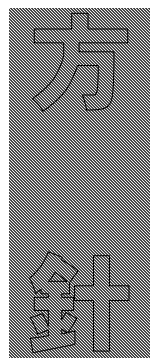


第43回日本のうたごえ全国協議会総会



2010年、21世紀になっての10年目を世界も日本も新たな激動の中で迎えた。

今、社会はリーマン・ショック、日本での新自由主義的構造改革の転換が迫られるなど、世界経済を荒らす新自由主義路線が破たんし、「ルールある経済社会へ」の動きが世界で広がり、平和の問題では核兵器廃絶への国際世論が高まっている。そして、日本では現状の政治の流れを変えたいと願う人々の声によって長年の自民党政権が終焉し、政権交代が起った。このことは、「政治は変えられる」という実感を国民のものにするものとなった。

その力で日本国憲法で保障された平和的生存権・いのちとくらしが輝く日本にしていくために、うたごえ運動も新しい歴史のページを大きく前進させる年とする活動を展開していきたい。

「年越し派遣村」で始まった昨年、マスコミも大きく取り上げるなかで、大企業が強行する非正規切りや雇い止めの実態が国民の前に明らかになった。年3万人を超える自殺者が11年も続く異常さ、後期高齢者医療制度や生活保護、母子・高齢加算廃止など政治の冷たさを、人々は肌で感じ、「この現実をなんとかしたいと願う心に、“働き生きる希望 心つながうたごえ”は多くの共感を得て広がっている。

平和の問題でも、核兵器廃絶に向けて国際的に大きく歩を踏み出した一年となった。オバマ米国大統領はチェコのプラハにおいて、「核兵器のない世界」を指すと演説し、9月、国連安保理事会で初めての首脳級会合においても、米国が提案した核軍縮・不拡散を推進する「核兵器のない世界」への取り組みに関する決議案が全会一致で採決された。今年も、国連で5年に1度開催される核不拡散条約(NPT)再検討会議が5月、ニューヨークで開かれる。

「核兵器のない世界」を求める声の世界で高まっている今こそ、再検討会議開催を絶好のチャンスとして、廃絶への世論と運動を大きく広げなくてはならない。

被爆国日本国民は、人類が核兵器と決して共存できないことを知っている。広島・長崎への原爆投下から65年となる節目の今年、核兵器廃絶への確かな足を踏み出す国際世論をつくるのが被爆国・日本の願い、責務でもある。世界に広がる平和の流れは、アジア・アフリカ・ラテンアメリカで広がる平和と自主的な地域共同体づくりに見られるように、急速に大きな変化を示している。

あわせて平和の問題では、日本の米軍基地の問題がある。普天間―沖縄の基地問題では、「基地のない平和で豊かな沖縄」という県民の悲願実現に向け、「宜野湾にいらぬものは名護にもいらぬ。名護にもいらぬものは日本の、世界のどこにもいらぬ」という想いに連帯し、安保改定50周年の節目に、「沖縄の問題」ではなく「日本の問題」として、安保条約解消の世論と運動と共に大きく広げる年にしたい。

また、憲法の問題では、「改憲手続法」(国民投票法)が制定され、今年5月に施行される中で、憲法9条をまもりいかす世論をさらに広げ、この凍結・廃止に向けていくことが求められている。「戦争、憲法9条に関わる事業については：原則として後援を行わない」、音楽・演劇団体等の文化行事への名古屋市による「後援拒否」の干渉等に対して、憲法・平和をまもる活動を強めることが求められている。

文化活動では、オーケストラへの助成金削減、文化・スポーツ施設の廃止の問題に続き、新政府は、行政刷新会議による「事業仕分け」で文

化予算縮減（スポーツ予算も）を打ち出した。芸術文化会議（伊藤京子会長）が「日本の文化芸術の発展に重大な危惧」を表明、批判の意見書を提出。音楽家が記者会見し、文化予算縮減の見直しなどを求める要望書などが出され、予算案に一定反映された。しかし、来年度からは廃止・大幅削減される。

こうした中で、うたごえ運動は、「働き生きる希望 心つながうたを」「憲法の心を歌いひろげる」「戦争も核兵器もない平和な日本と世界をめざすうたごえを」と活動を進め、今年のNPT再検討会議成功に向けては、100人を超える代表団派遣運動を展開している。

「2009年日本のうたごえ祭典・京都」での、「生きる・働く・平和・環境（地球）」の思いを府立体育館満席の人々とともに高らかに響かせることができた背景を見る時、人間らしい暮らしを求める声と行動がいかに切実であり、その声を結ぶ活動―歌うことが生きる力に―歌う喜びが生きる喜びにつながる―が求められているかを示している。

国際社会が核兵器廃絶に向けて新しい一步を踏み出した歴史的な年、いのちと暮らしを守ろうと人々が政治の流れを変えた年を受け、2010年、文字どおり町から国中に世界中に、反核・平和のうたごえを広げる、平和的生存権を現実につかむために、その実践の方針を全国の英知を寄せ合い、打ち出していきたい。

年度活動

方針（人々のねがいを結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、みんなうたう会）を旺盛に展開し、「共に生きる町づくり・地域づくり」のうたごえを広げる。

全市区町村、わが町・わが暮らしに、世界の羅針盤、平和憲法・九条をまもるうたごえを響かせる。

「演奏・普及活動」

「歌が欲しい」「一緒に歌いたい」のおもいが溢れる中、全国各地でたくさんの方の演奏会や音楽会が取り組まれ、成功すると共に、日常の演奏普及活動も共同を広げながら旺盛に展開され、「歌があつてよかった」と返ってくる1年となった。

〈たたかいと連帯のうたごえ〉

不当解雇、派遣切りが横行し、働く環境が劣化する中でそれを許すなと多くの人が立ち上がった。うたごえも集いに、宣伝行動や労働相談会に、メーカーに、働くもののうたをもつて積極的に参加し、たたかいの力になってきた。この間生まれた「あきらめない」「ありがとう」「U n i t e」など来い2009などがひろがっている。

大阪では音楽家ユニオンとの共同で文化企画が行われることが定着し、埼玉では「反貧困」の取り組みに積極的に関わり「連帯フェスタ」を幅広い音楽愛好家と共に成功させるなど、全国で「共同・連帯」が広がっている。

国鉄のうたごえは「JR不採用事件の解決とすべての労働者の雇用・生活を守るための7・15スクラムコンサート」を企画。100人を超える全国の国鉄のうたごえと開催地埼玉をはじめ首都圏のうたごえの仲間・市民が「連帯合唱団」を結成し、地域の労働組合、民主団体との共同の中で成功させた。CD「連帯く明日への切符」も好評である。

〈憲法を輝かすうたごえ〉

憲法を活かし輝かせる演奏普及活動は全国で多彩に繰り広げられた。兵庫では「憲法を守るはりま集会」で池辺晋一郎氏を招き、90人の市民合唱団「希望」を結成し、「私たちが進むつづける理由」ほかを演奏、過去最高の1300人が参加し成功させる大きな力となった。「希望」は継続して活動を続けている。

大阪・茨木市の「ピース9コンサート」は地元の音楽専門家、市民が一つになって取り組み、回を重ねるごとに参加者を増やし、地域の文化交流の場ともなっている。

各地の9条の会の集いや憲法集会で文化企画がしつかり位置づけられ、うたごえが大きな役割を果たしている例が数多く見られる。9がかさなる09年9月9日は静岡や函館で一日かけた取り組みが行われた。「…進みつづける理由」は各地でうたわれた。

憲法をテーマにした市民参加のミュージカル、劇も、東京、神奈川、岐阜、大阪、広島などで取り組まれている。

大阪のうたごえ9条の会、合唱団プリマベラ（千葉）などの、継続しての街頭行動は多くの人を励ましている。

〈被爆者と共に核兵器廃絶・平和のうたごえ〉

原爆症訴訟を闘う被爆者に連帯し、集会や座り込みでうたごえをひびかせ勝利の力となった。

3・1ビキニデーでは静岡のうたごえを中心に、ビキニデー集会での「海に生きたあなたよ」「青い地球を」をはじめ、墓参行進、青年集会などでうたごえを響かせた。

国民平和大行進には兵庫の松本英治氏を日本のうたごえとしては初めて通し行進者（東京・広島コース）として送り出し、それに呼応して全国でうたごえの響く行進が行われた。

原水爆禁止世界大会・広島では、広島文団連との共同で合唱構成を成功させ、長崎ではソプラノ歌手星野恵利、シンガー・ソングライター山本ヒロ、うたごえ合唱団の文化企画を成功させたほか、女性のつどい、青年のつどい、学生の集いでもうたごえをひびかせた。

原水爆禁止四国大会＝高松では、被爆ピアノとうたごえ企画を新婦人コーラスえぶろんが中心になり、市民や四国のうたごえの仲間にも呼びかけ1時間の文化企画を成功させた。

NPT再検討会議ニューヨーク大行動に参加するうたごえ代表を先頭に、うたごえを響かせながら、核兵器廃絶を訴え署名を集め、学習会&

うたごえが取り組みられている。

神奈川で開催された日本平和大会の集会や分科会でもうたごえをひびかせ、企画、進行の面でも大会成功の一翼を担った。ぞう列車が走って60年の年、愛知で記念音楽会を大きく成功させたのははじめ、全国各地で「ぞうれつしゃがやってきた」のコンサートが取り組まれている。

「平和音楽祭」「ピースコンサート」は20年以上継続している長野、高知、大阪北摂、東京みななど各地で開催され、「平和」を軸に専門家、音楽愛好家との共同を広げている。大阪では堺市の空襲をテーマにミュージカル「炎の街から」がつくられ、市民合唱団で上演され好評を博し、継続した取り組みにつながっている。

神戸市役所センター合唱団は対馬丸撃沈65年の沖縄で「海のトランペット」公演を、沖縄の合唱団と共同で成功させた。

「悪魔の飽食」は全国縦断コンサートを旭川、韓国で成功させた。

〈生きる力のうたごえ〉

全国保育団体合同研究会（大阪）では700人の子どもを含む1200人の大合唱が企画され、日本母親大会（京都）、日本高齢者大会（大分）の大合唱が大会の成功の一翼を担った。各都道府県での同様の大会でも多くのところでうたごえが積極的に関わり豊かな企画をつくっている。「よばれてうたう」だけではなく、歌い手を広げて「ともにうたう」取り組みが増えていることも特徴である。

学校公演、病院、福祉・介護施設などでの演奏やうたごえも精神的に行われ、明日を生きる力のうたごえが歓迎されている。高齢者運動、女性運動のなかでのうたごえ活動は活発である。環境問題をテーマにした演奏普及も増えている。

〈盛況なうたごえ喫茶〉

「うたいたい」「つながりたい」「要求を反映して、各地のうたごえ喫茶・うたごえ酒場はいずれも盛況で、サークル・合唱団主催のものにとどまらず、公民館の自主講座や民間のカルチャースクール、ホテル、旅

行社の事業などにも広がりを見せ、マスコミからも注目されている。要求に応えられるプロデューサー、うたう会リーダー、伴奏者が多数育つことでさらに大きな展開の可能性が見えている。

〈うたごえ運動60周年記念企画 うたは歴史を刻むく「うたごえと日本の作曲家たちコンサート」〉

09年は、山ノ木竹志（広島合唱団プロデュース）、木下航二、いずみたく、小林秀雄（睦の会・実行委員会）、安藤由布樹（実行委員会）、金井信（絹の道合唱団）、木下牧子（神戸市役所センター合唱団）が開催された。

〔創作活動〕

多くの人が“こぞつて歌える”愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

この1年、数々の名曲を世に送り出し、うたごえ運動の内外で多くの人々に親しまれ愛された林学、山ノ木竹志、門倉さとしという、かけがえのない3人の創作者を相次いで失った。彼らの作品と作品づくりの姿勢から学び受け継ぐべきものは大きく、創作合宿での「シンポジウム」など、様々な形で学んでいきたい。

昨年度も国民の切実な要求や願いを反映して、蟹工船をテーマにした構成劇「多喜二碑の前で」（北海道のうたごえ祭典）をはじめ多くの作品が創られた。

福井での全国創作合宿では「リストラ・首切り許さない時代を変えるたたいのうた」を創ろうと全国から72人が集まり、応募の詩、持ち寄りの曲をもとに20曲が新たに創られた。「派遣切りのこと、働くということ、長時間かけて意見を出し合い、詩作。アドバイスをもらいながら曲ができていく：今までに味わったことのないような喜びを体験し

た」（埼玉・林和恵さん）という初参加者の感想のように創作合宿は新たな創作者を生み出す重要な場になっている。ここで生まれた「Unité」はメーデー歌集で全国に広げられ、「そんな街いい合唱団」の徳山さんの「あなたと共に」は直ちに合唱編曲され、京都での日本のうたごえ祭典大音楽会で演奏された。

北海道、埼玉、東京、福井、京都、九州などでは独自の創作講習会が開催された。

オリジナルコンサートは、京都、千葉、愛知、広島、大阪など府県単位の参加を含め、38団体の発表とCD「草の根の歌びとたち」演奏者によるステージで構成された。講評委員の小村公次氏は、「通り一遍ではない“詩のコトバ”で表現する、という推敲や、掘り下げ、練り上げ」「詩を深く読み込み音楽で語ること」「直球勝負だけでなく、ひねりや風刺、フェイントをかけるといった表現を織り込むこと」などの大切さを指摘、それらの成果がうたごえ運動の創造的な力となって根付いている、という感想を書かれた。

全国の優れた創作曲を紹介する日本のうたごえ創作曲集は15年ぶりに「オリジナルソングブック」として発行、今後は毎年継続発行の予定である。この積み重ねが全国の創作運動を励まし、高めていくことを期待したい。

また、専門家との協力共同による作品づくりでは、神戸市役所センター合唱団で混声合唱組曲「いのちの木を植える」（谷川俊太郎作詞 木下牧子作曲）などが初演された。

今年も創作運動の果たすべき役割は一段と大きく、人々の魂をゆさぶり、心つなぐ歌づくりが求められている。

方針② 合唱発表会を地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

〔合唱発表会運動〕

うたごえ運動の大切な演奏普及と交流の場としての各地の合唱発表会・交流会は30都道府県・ブロック、9産業別、1階層で開催された。新しいサークルをおこし、歌を生み出しながら地域祭典の広がりの中で参加団体を大幅に増やした京都をはじめ7府県、3産業別で増やしたものの、全体としては微減となっている。依然として少なくない未開催の県があることは課題である。

全国合唱発表会は、合唱発表会6部門198団体が参加、豊かな演奏交流をおこなった。日程、部門分け、人数規定、審査・講評、運営など全国の要望も取り入れ一定の改善がなされたが、さらに改善の余地がある。

方針③ 地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

「2009年日本のうたごえ祭典・京都」

京都のうたごえ60周年と呼応して開催した2009年の日本のうたごえ祭典は、「この町に生きるうた」をテーマに、京都府立体育館6000人の大音楽会と合唱発表会、オリジナルコンサートを合わせて3日間でのべ11000人の参加で成功した。

音楽会は、うたごえの広がりと頂点を京都府立体育館での大音楽会一つで実現しようと企画。京都の老若男女1600人のうたごえ、20数年ぶりに取り組み、全国のうたごえの創造的連帯の力で祭典参加運動にも新しい広がりをつくった全国地方ブロック合同演奏、会場全体6000人の大うたごえ、大合唱の祭典合唱団と、企画のそれぞれがうたごえの持つ多様な魅力を輝かせた音楽会となった。

運営上、イベント派遣スタッフの配置は新しい工夫。感想で寄せられた音響のよさは、大会場には大合唱と出演登録を強め、また、創造スタ

ッフ・技術スタッフの間で創りたい音楽を共有できた結果。

協議会の組織の確立、運営する常任委員会とサークルの信頼関係、足もとを見すえ、一人ひとりの力を活かしかう祭典づくり、何より13地域で続けてきた合唱発表会運動が、地元京都での祭典成功の大きな原動力となった。そして、積み重ねてきた関西ブロックの連帯と、全国の創造的・組織的連帯が祭典成功を支えた。

「地方祭典」

うたごえを起こし、連帯を強め、共同を広げながらうたごえ祭典が取り組まれている。

北海道は60周年記念祭典を札幌で開催。毎年道内持ち回りで開催してきた創造的蓄積、運動的蓄積と蟹工船をテーマとした合唱劇、池辺晋一郎氏とうたごえ合唱団の企画が呼応し大きな広がりな成功した。

九州は大分で浅井敬壹氏を招き、「正義の基準」140人の合同演奏を柱に開催され、宮崎から20人がうたごえに参加、青年が46人でステージをつくるなどの広がりも見せた。

奈良では日本のうたごえ祭典・京都への連帯と位置づけて、関西ブロックの連帯の中、本番指揮者も招き合同企画、うたごえがシミュレーションされ、日本のうたごえ祭典成功の大きな力となった。

全国教育のうたごえ祭典とジョイントで開催された広島のうたごえ祭典は県下30団体にひろがったうたごえ喫茶、うたごえの力も合わせ、創作曲「キャッチミー」を光らせて成功させた。

山形、長野、愛媛で県祭典が行われている。京都では13地域、3分野で、北海道・札幌・道南、東京・足立で地域祭典が開催された。

「産業別祭典」

教育（広島）、郵便（東京）、医療（長野）、国鉄（京都）、電通（兵

庫)、自治体(岡山)、港湾(横浜)、私鉄(東京)、保育(愛知)で産業別祭典・交流会が開催された。

国鉄祭典は、日本のうたごえ祭典・京都プレ企画として開催。7・15スクラムコンサート成功からの積み重ねと、09祭典・京都実行委員会協力で成功した。

電通祭典は、派遣労働者の問題を職場内にとどまらない視点で取り上げ、地域争議団支援文化の夕べの積み重ねもあり、連帯が広がる祭典となった。

医療祭典は、若い医療従事者、医学生や利用者、支援者とともに成功させた。

東京で開催された、郵便、私鉄祭典はいずれも東京のうたごえ協議会の大きな連帯で成功した。保育は、若い保育士が実行委員会に積極的に関わり交流会を開催した。

職場のうたごえは、現役労働者が少なくなる中でどう活動を維持するかが共通の課題となっている。祭典のあり方も含め産業別の枠を越えた議論も必要になっている。

方針(4)「歌の広がりをつたごえ新聞読者につなぎ、豊かなうたごえ発信ヤーナル」を確立する。

「うたごえ新聞・季刊」「日本のうたごえ」

うたごえ新聞は「いのちと暮らし、憲法の心を輝かすうたごえ発信」の基調のもと、うたごえの魅力を外へ、広く音楽文化運動・社会問題を観る目を運動の中に、の両輪で進め、09年は日本のうたごえ祭典・京都成功へ、を軸に編集にあたった。

年越し派遣村に象徴される大企業的首切り強行の中、現状を変えていくためにうたごえは、の視点からJMIU生熊茂実委員長らの登場で「派遣切りを許さない闘いと歌」を特集。イスラエル・パレスチナ問題、ベ

ネズエラの音楽(海外の話題では訪韓レポート他)、平和的生存権・憲法の視点からは、弁護士・伊藤真伊藤塾塾長、安斎育郎立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長らへのインタビュー他識者の協力を得て特集。音楽家の活動からはヴァイオリニスト五嶋みどりさん、日本のうたごえ祭典合同曲「生きる」の作曲者武義和さんを紹介。

うたごえの活動からは、編集部取材と通信1200通で、保育とうたごえ、高齢者のうたごえ、「I Love 9」、各団の音楽づくりなどを特集。

09年は4本の新企画―(1)「09年うたごえ拓く、サークル・合唱団の活力を探る」、(2)「私とこの歌」、(3)「世界愛唱歌めぐり」、(4)「だんだんファイト 団塊応援歌」―を組んだ。特に(2)(3)は好評で通年で継続。

“読み・作り・広げる”うたごえ新聞運動、09年注目は東京のうたごえ読者拡大推進チーム“プロジェクトY(わくい)”の3回にわたる“うた新まつり”がある。ゲスト(ソプラノ塩谷靖子)を迎え“ときめきインタビューライブ&ミニコンサート”、識者を迎えての職場のうたごえ座談会、足立区での音楽リーダーのうたごえ新聞の話と区内在住読者

の音楽家によるミニコンサートは、いずれも本紙企画に反映し、音楽だけでなく読者の輪が伝えられた。と位置づけるうた新フォーラムは、奈良、東京、大阪、京都、長崎で開催。

また、静岡の縣政四さんの提案で企画した忌野清志郎(写真家岡部好氏寄稿)は注目を集めた。

京都のうたごえによる祭典成功への毎号連載、09年平和行進・通し行進者松本英治さんの通信も紙面を豊かにした。

運動の“今”“輝き”を伝える通信・企画提案は紙面の充実とともに運動を豊かにする大きな力である。その影響力を大きく広げるために、3月のうたごえ新聞創刊55周年うた新まつりを前に過去最高読者数達成が急がれる。

季刊「日本のうたごえ」はNo.143〜146を発行。特に、No.14

5、林学追悼座談会、「ゆれ動く世界と音楽」（川田忠明）、No.146の09祭典合唱発表会批評座談会、「ベートーヴェンの『第九』と現代」（山科三郎）は注目を集めた。No.146は例年の日本のうたごえ祭典・合唱発表会個別評を別冊にして、そのスペースで演奏批評座談会の掲載は好評。

うたごえ新聞で広く拾うテーマを掘り下げ紹介し、そこから運動を構築する力にする本誌の役割を運動全体の共通認識として、誌面の充実とともに読み、力にしていけることが一層求められている。

方針⑤ うたごえ出版物をより多くの人にひろめる。

〔事業・普及活動〕

09年度は、あらたに事業普及部会をたちあげ、うたごえがかかわるイベント、集いには事業売店を設けることなど、全国的な普及運動を強調した。奈良蟻の会合唱団、千葉のうたごえなどニュースで出版物を毎回紹介、東京の事業委員会定期開催などは教訓的である。

「09メーデー歌集」は時宜を得た選曲とネーミング、全国のうたごえで広める活動で08年を2000冊上回り普及で大きな前進ができた。一方で、労働組合で買っていたいただいたものの歌う機会が作られなかったり、すべての加盟団体で活用する点では課題も残した。

「09祭典歌集」は魅力的な企画、全曲伴奏譜付の使いやすさと、うたごえに参加する祭典運動のひろがりの中で、開催地京都で1300冊の普及をはじめ、近年最高の3800冊が普及された。

2010年NPT再検討会議成功に向け、原水爆禁止世界大会実行委員会の企画協力のもと出版した歌集「歩いて行こう」は、署名、カンパ活動などと連動した取り組みになりひろがっている。

オムニバスCD「草の根のうたびとたち」、国鉄のうたごえ結成55

周年事業CD「連帯」、CD「林学作品集・おくりもの」は好評、全国に広がっている。

アーチストとしては津軽三味線の西はじめの初出版CD「廻帰」が好評で、団体、サークル・合唱団からの出演依頼も増えてきている。

合唱団や個人での自主出版も重視してきた。インターネットの活用も改善を重ねてきた。

方針⑥ 演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめる、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

〔演奏・創造活動〕

京都や北海道では祭典運動の中にリーダーづくりを位置づけ、実践と学び合いの中で新たなリーダーが育ってきている。また、各地の講習会、大阪指揮研究会、東京指揮考座、関西合唱団日曜講座などの継続した取り組みは、学び成長しあう場として貴重な経験を生み出している。

東日本合唱講習会（東京93人）は、取り組みの遅れから参加組織にや課題を残したが、講師の要求に対する反応の良さや合唱力の前進がみられ蓄積を感じさせた。西日本合唱講習会（京都265人）は祭典開催を色濃く反映し、祭典合同曲の合唱、近年最高の参加者、関西ブロックとしての準備、講師陣の事前の打ち合わせなどで充実した講習会となった。

全国指揮・合唱指導講習会（松本、102人）は24回を数え、年々その充実度は増している。常連の受講者には成長も感じられ、少しでも向上しようと地道に続けることの大切さを物語っている。コース別指揮講座は受講者も多く、学ぶ意識の高揚と連帯感も生まれている。新しい指導者・リーダーの育成を視野におき、合唱団としての積極的な参加運動も大切である。

日本のうたごえ合唱団2009は170人で結成され新春合宿と東西

の練習会を経て、日本のうたごえ祭典・京都では客演指揮・池辺晋一郎氏を迎えて期待に応える優れた演奏を示した。

これらの積み重ねの中で、2009年日本のうたごえ祭典・京都における合同曲の演奏は合唱隊の人数、そして演奏の質においても高水準の結果を生み出した。

学習・教育活動を更に充実させる上で演奏会、講習会などの情報交換、指揮者・指導者の問題意識の向上・交流など、指揮者・指導者ネットワークづくりが必要になっている。

方針⑦「青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う青年をたくさん迎える。」

「青年のうたごえ」

青年を取り巻く情勢を反映し、全国創作合宿や青年創作合宿で作曲が生まれ、各地の演奏会や祭典で青年と共にうたごえステージが企画された。

全国青年のうたごえ祭典は長野で2年ぶりの開催（青年のうたごえ音楽祭＝いな）、参加者組織など課題はあるが、開催地伊那の青年とのつながりなど、一定の成果もあった。

2009年日本のうたごえ祭典・京都では、現地青年実行委員会が中心となって、ロックソランと合同合唱「あきらめない」「翼をください」に、全国の青年と共に取り組んだ。京都では府内各地で練習会を行ない100人の青年を組織し、そのいくつかは活動を継続中。

「歩いて行こう」が「核兵器なくそう世界青年のつどい」のテーマソングとして位置づけられ、ビキニデー集会や国民平和大行進、原水爆禁止世界大会、日本平和大会など、あらゆる場面で青年が歌い交わす場面を作り出すことができた。

「ぞうれっしゃ…」を歌って育った世代が、各地のコンサートの実行

委員や出演者として、力を発揮している。宮城では仙台合唱団アカペラ講座で集まった青年たちが、若星Z☆（ワゲスターズ）として全国オリジナルコンサートに出演した。北海道のうたごえ祭典でも現役の学生サークルが久々に参加。九州のうたごえ祭典＝大分では、当初予定になかった青年企画を地元中学校合唱部のメンバーなどを組織しながら、大分、福岡、長崎、佐賀、鹿児島と幅広く46人のステージを作り上げたことは教訓的。青年の活躍と成長の場をどう生み出すがポイントになっている。

方針⑧「サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。」

「組織建設」

魅力ある演奏普及活動を通じて会員が増えている団体が数多く見られる。

みやぎ紫金草合唱団はオリジナル組曲「明日の自分を信じて」の演奏普及、コンサートの成功の中で会員、うたごえ新聞読者を前進させている。

北海道合唱団、合唱団ききゆう、三多摩青年合唱団、絹の道合唱団、名古屋青年合唱団、洛北青年合唱団、関西合唱団などでは研究生制度で会員を増やしている。

一時的な市民合唱団から恒常的な合唱団への発展、うたごえ喫茶を基盤にサークルが誕生する例が生まれている。女性団体、高齢者団体の中うたごえサークルが生まれている。これらの広がりをネットワーク化し協議会建設強化に結ぶ条件は広がっている。

東京ではうたごえ協議会の役割を丁寧伝える中で新たな加盟団体を生み出している。

定期的な会議と情報の共有、共同の取り組みのなかで協議会が活性化しているところが増えている。一方依然として、加盟団体が無い県が2県、協議会のない県が17県あることは課題である。

ブロックの連帯活動では、日本のうたごえ祭典・京都のブロック合同企画にともなうて交流が進んだ。

北海道、東北、関東、北陸、関西、九州では祭典、交流会、定例会議などでブロックの連帯が前進している。

宮城で開催された東北のうたごえ交流会は、数年の準備を重ね「東北のうたごえフェスタ」を実現、市民に開かれた音楽交流の場をつくることができた。

「うたごえ新聞・季刊」「日本のうたごえ」読者拡大

うたごえ運動を豊かに大きくしていく上で、うたごえ新聞をよく読み、魅力ある紙面をつくり、その読者を広げることが不可欠と、「読み・つくり・広げる」うたごえ新聞運動を年間を通じて取り組んだ。機関紙で記事を紹介し、練習時に読みどころを話す、通信を送るなど、新聞を身近なものにし、「うた新チーム」（東京・「プロジェクトY」、愛知・「輪広のじゃん」、京都・「チーム輪っか」など）が立ち上げられ創意溢れた活動を展開。協議会としてもニュースの発行、会議の議題のトップに読者拡大を位置づけるなどの努力の中で貴重な前進をつくり出してきた。

岐阜・多治見青年合唱団では曜日ごとの団内サークル員すべての購読を決め、県目標達成に貢献。福井は集団のとりくみを強め、その情報をメールニュースで共有し、前半で目標を達成し、北陸ブロックの連帯を起こした。長崎は祭典実行委員会にうたごえ新聞部を位置づけ、定期的な会議と行動で支局体制を確立し、大きく前進している。広島は、広がるうたごえネットワークをうたごえ新聞で結び昨年に引き続き前進している。

季刊「日本のうたごえ」は、各号で注目される記事が掲載され、毎号一定の特別普及がされているが、定期購読者は横ばい状態にある。運動の質を高め、理解者、協力者をひろめ、音楽の内容を深め、新しい運動の担い手を育てることから機関紙誌を会員がよく読み、広げるとはますます大切になっている。

方針⑨「郷土のうたと踊り」を活発にし、専門家との協力協同、全国講習会の充実、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

「郷土の歌と踊り」

うたごえ運動の中の郷土芸能の取り組みを見直し、新しい担い手への継承も含め新たな動きが出てきている。

東京では「傘踊り」「花笠音頭」などの講習会が開かれ、調布狛江合唱団は郷土芸能と合唱をコラボした作品を演奏している。神戸市役所センター合唱団では、和太鼓と笛、うたと舞の織りなす共演で「おくのほそ道」公演を成功させた。東北では東北のうたごえ交流会にむけ、東北各地の民謡を合唱アレンジ（編曲・小林康浩）して合同演奏、D51合唱団の演奏レパートリーには必ず民謡を取り入れている。国鉄広島ナツパーズでは練習会に「江差の餅つき囃子」を取り入れることで結集がよくなった。

全国合唱発表会一般の部に京都民謡囃子合唱部が出演し注目を浴びた。

09年祭典・京都では全国合同として祭典用にアレンジされた「山のお囃子」を東西のチームも参加して成功させることができた。

東日本郷土講習会は70人の参加で、一頃から較べ人数を減らしている。内容、講師、呼びかけ対象の拡大などを今後検討していく必要がある。

うたごえ新聞に「ふるさとの歌・祭り」が連載され好評である。和太鼓、郷土芸能のサークルは全国に多数有り、それぞれ活発な演奏活動を行っている。

独自のネットワークづくりと共に、うたごえ協議会としての働きかけ、共同の取り組みのなかで、うたごえ運動の中での郷土芸能の位置づけを高めていく必要がある。

方針①〇 世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪を広げる。

「国際交流」

韓国3・1独立運動90周年記念歴史認識の共有と平和のための「シンポジウムと文化交流の旅」を日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会との共催で成功させた。

北東アジアの平和が焦点となっている今、国際友好団体との共催で実現したこの企画に、韓国の平和の木合唱団、仁川平和の風合唱団、サム・トゥッソリメンバーも参加し、12年に及ぶ日韓音楽交流の積み重ねの成果を見た。

11年連続の5・18光州芸術祭参加ツアーに9人が参加、仁川市民文化芸術センターとも交流ができた。同センターの平和の風合唱団は3年続けて日本のうたごえ祭典に参加している。“光の種をまくときを歌う合唱団”（長野）は大邸市で演奏交流。

愛知では、名古屋・南京友好都市30周年市民文化交流企画が、この間の「ぞうれっしや：」交流を進展させながら、右翼の妨害、市の後援取り下げをはねのけ成功した。

このほか男声合唱団の中国・南京公演、「アラスカともだち太鼓」の日本公演など音楽を通じての国際交流は盛んになっている。

年日本

祭典 京都

2009年日本のうたごえ祭典・京都実行委員会

はじめに

京都のうたごえ60周年記念として、2年あまりの準備期間をかけて開催した日本のうたごえ祭典・京都はこの町に生きるうたごえは、600人の大音楽会をはじめ3日間でのべ11000人の参加で成功しました。一緒に準備を進め、歌の練習を重ねてきたみなさん、当日聴きにお越しいただいたみなさん、この取り組みを様々な場面で応援し支えて下さったみなさんに厚く御礼申し上げます。

10月24日の大音楽会は、京都の老若男女1600人のうたごえで始まり、全国からの参加者によるブロックごとの演奏、会場が一つになつてうたい交わした大うたう会、会場いっぱいを暖かい音楽で包みこんだ大合唱と、それぞれがうたごえの持つ多様な魅力を輝かせた音楽会になりました。人々との出会い、音楽との出会い、たくさんの宝物をありがとございました。ここに、ご報告と御礼を申し上げます。この祭典を糧にして、61年目の新しい歩みを踏み出していきたいと思えます。

企画のまとめ

Ⅱ 3つの視点 Ⅱ

● 生きること・歌うことへの問いかけが、祭典テーマ『この町に生き

るうた』に。

安心して暮してゆくことが厳しいこの時代、社会のいろいろな問題に向き合いながら人は生きています。その中でうたはどう生きる力になっていくのだろうか。一人ひとりの生活の中に必要なうたをこそ届けてゆきたい。人間らしい生活に欠かせない「文化」の一つとして、誰もが主人公になって、自らの意思を表現し共にうたい合う——歌うことが生きる力に、歌う喜びが生きる喜びにつながる祭典をつくらう。そんな願いが集まって祭典テーマ「この町に生きるうた」は生まれました。丹後から南山城まで京都の町々に、北海道から九州・沖縄まで日本の町々に、そこに生きる人たちの想いに寄り添い、暮らしの中で息づいている「うた」を交歓しあう祭典をつくらう。その底に流れる企画の柱は4つ。「生きる・働く・平和・環境（地球）」

●地域の人々と共に歩んだ60年の中に京都らしさが。

京都のうたごえ60年を記念して開くこの祭典。では「京都らしさ」とは？ 観光パンフレットにある「京都」だけでなく、そこに暮らす人たちの想い・ねがいを伝えるものになりたい。話し合いを重ね「13の地域祭典を基盤に、共にうたを作り・歌い・広めてきたその歩みにこそ京都のうたごえらしさがある」という確信に到達。地域、職場の人たちと広くつながって私たちの町・京都に生きる人たちによる祭典づくりを。そのためには今まで歌ったことのない人にも歌って参加してもらおう。京都府民音楽会（京都合唱発表会本選）への参加者は毎年およそ700人。その一人ひとりが両手に一人ずつ新しい歌い手とつながろうと、2000人の京都老若男女のステージを目指しました。

●ひとつの入れ物（体育館）につまったうたごえの魅力・宝物。

祭典の音楽会は京都府立体育館での大音楽会ひとつと決定。「うたごえの魅力すべてが詰まったものに。足を運んで下さったお客様に、今のうたごえの広がりや頂点を知ってもらおう」と音楽会と交流をひとつの入れ物でつくることを確認。

そして、うたごえ運動の魅力を大きく3つの視点——①「日本の町々

でうたをつむぎ、歌い、届けているたくさん仲間がいること」、②「うたごえ運動の大地とも言える、誰もが主人公となる歌との出会い・ふれあいの場『うたごえ』」、③「誰のために何をどう歌うのか——創造の原点と方向を明確にもった合唱力」——でとらえ、第Ⅱ部「全国プロック企画（北から南から）」、第Ⅲ部「6000人の大うたごえ会（あなたと）」、そして祭典合唱団による第Ⅳ部「かさなる想い未来へ」が大音楽会プログラムに加わり、第Ⅰ部の「老若男女京都のステージ（この町で）」と合わせ、Ⅳ部構成となりました。

また、体育館での音楽会を成立させるために、音響重視の舞台づくり、ステージシートの作成、すべてのドアへのドアマン配置などの手立てについても具体化しました。

Ⅱ音楽会づくりⅡ

●第Ⅰ部・この町で老若男女京都のステージ

13の地域実行委員会が地域の特徴を生かした練習曲の設定と歌い手登録の目標を持ち、地域合同練習とサークル公開練習やうたごえ会を結合しての練習会が持たれました。京都参加者が1374人、ここに全国の郷土・年金者組合・青年・保育など274人が加わり、第Ⅰ部は総勢1648人のステージとなりました（残念ながら新型インフルエンザの流行で当日参加できなかった子どもたち、障がいのある仲間たちがいたことも付記しておきます）。また、各地域のリーダーがその運営と音楽づくりを支えました。

●第Ⅱ部・北から南から全国プロック企画

全国を5つのブロックに分けて、各地で歌い広めている仲間たちの顔と歌を紹介。選曲・声・音楽づくりともにプロックの個性を豊かに表現。観客からは「この企画ならではの歌が聴けて楽しかった」、また、取り組んだ側からは「プロックでどんな人たちがいるのか初めて交流できた。ありがとうと言いたい」（九州・綾正博）、「9県の人の意見を聞くだ

けでも至難で千差万別、(中略) 困難さをひとつひとつ繋いでいったのが、ニュースの存在と出来る範囲での直接交流、そこにうたが接着剤になった。(中略) 小さいサークルが参加出来たこと。等々一層祭典が身近に感じられた(今まで企画はレッスンが保障されているレベルの合唱団しか合唱に加われなかったのが、誰でもうたつて参加できた点) 企画に感謝します(愛知・舟橋幹雄)との感想が寄せられています。京都の呼びかけを受け止めた全国のブロックの取り組みは、うたごえのもつ創造的連帯の力を改めて示しました。また韓国から参加の「仁川平和の風合唱団」の「人間の歌」は多くの人の感動を呼びました。

*参加者数「北海道・東北180人」「関東250人」「中部380人」「関西550人」「中国・四国・九州270人」合計1630人

●第Ⅲ部・あなたとく6000人の大うたう会

「うたう会」を柱のひとつとして音楽会企画に組み入れたのも、今回の特徴です。会場が一体となれる自然な空間を作り出すために、綿密且つ自由な発想で準備が重ねられました。限られた時間により多くの歌を歌えるように5つのテーマ毎のメドレー形式とし、うたごえ愛唱歌と共に誰もが知っている歌も選曲。何度もの実地練習で演奏曲・司会・伴奏形態を練り上げ、6000人の大うたう会を実現しました。そのオーブニングには子ども1000人を含む200人のロックソーランが生バンドによって演じられました。

●第Ⅳ部・かさなる想い未来へく日本のうたごえ合唱団・祭典合唱団

帆足正規さんの能管に続き、池辺晋一郎さん指揮による日本のうたごえ合唱団、そして祭典合唱団による演奏は大合唱の魅力を伝えました。

全国の職場合唱団・混声合唱団・男声&女声合唱団・地域のサークル・合唱団すべてのみなさんに祭典合唱団「女声・男声・混声合唱」への参加を呼びかけ、全体でのべ1517人、全国男声合同としては近年最高の273人を実現しました(女声合唱883人、混声合唱1154人)。

京都だけでなく東京、奈良と指導に奔走された女声合唱指揮者鈴木捺香子さんの音楽づくりと人柄は多くの女性を魅了。「光のエチュード」「生きる」など、魅力的な楽曲がうたごえの新たな財産となりました。また、池辺晋一郎さん指揮の「アメイジング・グレイス」は初演以来全国の様々な場面で歌い継がれてきた蓄積に、作詞者である山ノ木竹志さんへの追悼の想いが重なって感動的な演奏となりました。体育館という条件の中で、密度の濃い演奏と観客の集中が高い音楽的到達を作り出しました。

●地元関西ブロックの大きなバックアップ。

08年末からブロック企画についての話し合いをはじめ、本番は550人で第Ⅱ部の最後を飾った関西合同の取り組みと、その先頭に立ち、プレ企画として10月4日、奈良のうたごえ祭典を成功させた奈良のうたごえの存在は、組織的にも音楽的にも京都を大きく励ましました。

●夢を立体化し具現化するたくさんの優秀なスタッフの存在。

「音響が良かった!」との感想が多く寄せられています。「大会場には大合唱が音楽会成立の条件」と歌い手登録の取り組みを強めたこと、創造スタッフ、技術スタッフとの間でつくりたい音楽の共有が出来たことが大きな要因と言えます。舞台・演出・音響・照明はじめ舞台裏・表で走り回った人、夜を徹して登録者整理・立ち位置表づくりに関わった人、第Ⅰ部の伴奏、第Ⅲ部のうたう会、ロックソーランなど、地域、サークルを越えて音楽会を盛り上げたバンドスタッフなど、それもまた今回の祭典の中で見えてきた財産のひとつです。限られた空間・時間をつかってどう夢を立体化させるか。たくさんのスタッフの存在と努力無くして祭典の成功はありえませんでした。

組織・宣伝活動のまとめ

◆組織宣伝計画の基本方針

2年前、全国の祭典を迎えることが決まりました。京都のうたごえ協議会としては、臨時総会で消極的賛成という決定でのスタートで、協議会加盟サークルでも、祭典に対しての温度差がありました。また、20年ぶりの全国祭典で、久しぶりというより、初めて経験する人が多い状況でもありました。ですから、組織宣伝の最初の仕事は、各サークル・地域・分野をつなぐパイプ作りでした。そういった準備活動を経て、組織宣伝計画の基本方針「すべての参加者が歌い手となり、共に作り上げ、歌い交わす祭典組織を目指す」を打ち出し、大音楽会を府立体育館6000人で満席にするとの目標を掲げ取り組みました。その基本計画のもと、地域祭典実行委員会を軸にした地域実行委員会作りを呼びかけ、京都府民音楽会では、地域合同を取り組むなど、地域主体の祭典の組織活動をすすめました。

◆オレンジジャンパーの大宣伝と募金活動■東京2008

賛同募金を広く集める運動では、京都府立体育館を借りるための初期費用などが必要な250万円を2008年12月中旬に、集める目標を掲げました。特に、2008年の日本のうたごえ祭典＝東京では、祭典事業と連動して、100人を超える京都の仲間がオレンジのスタジャンを着て、祭典パンフレットを広げ、京都の賛同金を集めました。祭典の引継ぎでは「祇園祭」の一節を、合唱発表会交流の部には「明日へ」を京都の連帯で演奏し、次年の京都開催をアピールすることができました。大音楽会の送り出しでは、全国の仲間から「来年京都に行くよ」という嬉しい励ましがあり、「うたごえ祭典がいよいよ京都に来る！」と実感されました。この取り組みでは、京都だけではなく、全国の仲間の気持ちも盛り立て、祭典当日までの参加運動へとつながっていく大きな力となりました。東京での祭典後は、「協力のお願い運動（祭典賛同、実行委員参加、宣伝協力、歌い手登録、うたごえ新聞広げる）」を組織宣伝活動として展開しました。

◆府下13の地域祭典実行委員会を軸にした組織活動

地域祭典実行委員会を軸に、それぞれの特色を生かした形で組織的な取り組みが広がられました。西京、中右京地域では、うたごえ祭典プレ企画として、2009年3月に音楽会を開催。そのほかの地域でも企画や独自の練習会が多数取り組まれ、従来の地域祭典の参加者の枠を超えた多くの人たちが参加し、地域発信の京都祭典を大きく支えました。また、年金者、青年、子どもなどの分野で実行委員会を立ち上げ、音楽会へ歌って参加の取り組みも、組織活動の力となりました。

2009年4月第4回祭典実行委員会ではチラシとチケットが完成し、京都実行委員会参加団体、地域実行委員会、分野にチラシ・チケットが手渡され、大音楽会に向けたチケット普及の運動が具体的に始まりました。京都うたごえ協議会加盟サークルは、組織指標（歌い手登録、チケット、うたごえ新聞普及）に基づき独自の目標を立てました。地域分野からも広く組織宣伝委員会に参加し、お互いのパイプを強くする工夫をしました。各地域も独自の目標をもち一緒に進めていきました。6〜7月に開催された府下13の地域祭典では、祭典曲の地域合同演奏や練習会、うたごえ会など大音楽会と連動した取組みが行われました。

◆「歌い手は広め手！」全員参加のチケット普及活動

チケット普及の目標の節を、祭典実行委員会、祭典合同練習会、リハーサルに設定しました。特に祭典合同練習会では、歌い手が一堂に会することもあり、企画委員会、組織宣伝委員会が連携してチケット普及を取り組みました。

直前の練習会では、各サークルのチケット普及担当者の会議を開き、音楽会ギリギリまで府立体育館6000人で会場一杯にしよう！と取り組みました。チケット普及ニュース「レッツ7000！」をメール、FAXニュースとしてその時々状況に応じたニュース発行を続けました。このニュースは、特に祭典直前は日刊で発行され、当日までチケット普及を「歌い手は広め手」と呼びかけ、励まし続けました。

全国の連帯―2400人を超える全国の参加、賛同募金の早期目標達

成—は現地京都を大いに励まし、全国の京都への励ましと期待が、開催地でのチケット普及の更なる刺激となりました。組織宣伝委員会では直前には、連日各サークルへのチケット普及の励ましの電話掛けなどできることはやりきる体勢を作りました。各サークル、地域はその働きかけに応え、最終盤は日ごとにチケット普及が広がっていきました。また、年金者組合京都府本部、京都民主医療機関連合、京都市職員労働組合、京都府職員労働組合など、組合・団体のチケットの財政補助が広がり、祭典参加運動の支えとなりました。

◆宣伝活動

宣伝では、集会での宣伝などの他、会場周辺にポスター掲示をし、祭典間近の雰囲気を作りました。チラシについては、最後まで使い切って活かしきろうと新聞折り込みや、会場周辺のポストへの投函などを行いました。マスクミ関連については、開催を連絡し、数紙掲載していただきました。当日はポスター、チラシを見て参加した人もいて、とても有効な宣伝活動でした。

◆うたごえ新聞読者会「チーム輪っか」

賛同募金とともに、うたごえ新聞の読者を迎える運動にも力を入れました。うたごえ新聞読者会「チーム輪っか」の発足（2009年3月16日）は大きくこれを牽引し、京都のうたごえ新聞読者数は過去最高の峰を達成しました。

うたごえ新聞本紙へ各地域の取組みの掲載など、より身近な新聞となり普及を進める力となりました。

祭典組織としては、賛同募金は目標を大きく超え、当日は、6000人の会場を一杯とすることができ、大成功の音楽会を迎えることができました。この祭典を通じて、新しいつながりがたくさん生まれました。

事業活動

前年の日本のうたごえ祭典＝東京でのオレンジのスタジャンに始まった事業活動は、祭典を知らせる宣伝活動としても位置づけ取り組みました。地元の京の酒「美し唄」と「京の野菜せんべい」をグッズとして扱い、全国にも好評でした。「祭典Tシャツ」は企画で第一部の衣装にも使用し、「祭典合唱曲集」は京都で1000冊をこえる普及となりました。「曲集」は基本的に全曲伴奏譜掲載するなど「使える歌集」としても人気があり全国的にも過去最高の普及となりました。合唱発表会以外の音楽会は大音楽会のみでしたが、祭典事業売店の売上は例年並みの実績をあげました。祭典の感動を残すビデオ、DVDも予定数をこえました。全体として、事業活動として一定の収入を生み出すことができました。

また、事業委員の「手づくり小物」や提供品の「箸袋」なども、みんなで楽しく広げる事業活動としてできました。

財政活動

1年前の東京での賛同金集めに始まり、前年のうちの京都の目標達成と、財政活動についても早い取り組みで進めました。関西ブロックの奈良からの逸早い目標達成は全体の運動を励まし、全国からの賛同金も目標を超えました。事業活動の成功、何より、6千人の会場を一杯にするチケット普及により、財政的にも成功させることができました。開催決定時から「絶対に赤字にしない！」という想いがみんなのものになって財政活動が意識されていたことが何より大きかったと言えます。それは、20年前の祭典を知っている人の終了後の挨拶が「赤？ 黒？」という質問で始まり、「大丈夫！」と答えると「よかった！」と喜ばれる姿に端的に表れていました。

運営について

今回の祭典は、運営委員の中でも、20年前の祭典づくりを知らないメンバーがほとんどのとりくみでした。京都の中では「今年のうちごえ協議会のとりくみは祭典の成功が中心」と祭典運営委員会と協議会の常任委員会を一本化しました。これが、祭典の取り組み全体を全員の共通認識にする点でよい効果を生みました。祭典の各委員長と協議会三役による三役調整会議、直前にもたれるようになった「次の一手会議」、など各委員会を有機的に結合させる運営上の工夫も行ないました。

そして、企画と組織、事業の各委員会の相互乗り入れ的な活動スタイルになり、各部門がつながりあって役割を果たしました。事務局実務の体制については、人の配置含めて課題を残しました。何のための実務なのか、を明確にした指示、作業、の必要性は教訓でした。

企画委員、事務局員を派遣してくれた奈良のうちごえ協議会をはじめ関西ブロックの連帯は運営上も大きな支えでした。毎月のブロック会議でも、状況を報告し、各府県から助言をもらうことができましたし、当日の運営でも大きな支えとなりました。

例年のように全国協議会役員が当日運営を支えました。しかし、今回は、全国への一般要員の要請をせず、イベント専門の派遣スタッフを配置したことは大きなポイントでした。財政的にも特別の経費が必要なほどではありませんでした。なにより、きちんとドアマンが立っていることで、外部の音が会場内に届かない、入場する人が音楽会を意識するなど、きちんと仕事として対応してくれるスタッフを配置することは企画成功の大きな要素となりました。

おわりに（ゆりかえつて）

2007年夏、2年後に迎える京都のうちごえ60周年にむけてどのような取り組みを進めて行くかを京都うちごえ協議会で話し合い始めた

頃、突然、全国協議会四役から「京都で2009年日本のうちごえ祭典の開催を検討してほしい」の打診を受けました。急遽9月の京都うちごえ協議会三役会議に議題に乗せ、常任委員会で方向性を検討、10月のサークル代表者会議、11月の臨時総会で京都うちごえ協議会の構成員に諮り、「京都のうちごえ60周年を『日本のうちごえ祭典京都開催』で」という提案を、反対0、保留2、賛成31で決定しました。

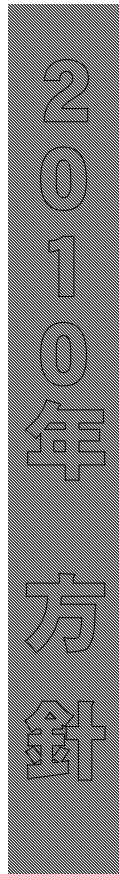
2カ月足らずという緊急の提案、論議時間にもかかわらず、常任委員会の提案に対するサークルの逸早い対応と前向きな姿勢は、前回祭典以後の20年間で京都うちごえ協議会の組織がしっかりと確立し、運営する常任委員会に対する信頼関係もできていることを感じました。

「決まればやる」「消極的賛成」「絶対に赤字にしない」などその時点で言われた言葉のいくつかは、足もとを見すえ一人ひとりの力を活かしかう祭典づくりの象徴となりました。そして、この20年間13地域で続けてきた合唱発表会運動が、祭典成功の大きな原動力だったと言えます。

新しいものは生まれたか。火の笛から歌った『祇園祭』は京町衆の心意気を現代に重ねて届けたか。次の時代は見えたか。なにより、京都のうちごえの心意気を示せたか。そんなことをもう一度見つめつつ61年目、新しい一步を踏み出します。

「全国のみなさん、本当にありがとう！」

平和生 力歌 世界 輝 青地



歴史が、大きい転換の時代に入りつつあることは、大多数の国民の実感である。

うたごえは、その時代と向き合い、「うたごえは平和の力」「うたはたたかいたいともに」「うたごえは生きる力」と、うたい、つくり、広げてきた。とりわけ、広範な人々にうたごえを広げる活動の中で、質的にも、量的にも前進させてきた。

この新しい時代の転換にふさわしい「広がりをつくる大普及」をキーワードに共同・連帯のうたごえを響かせたい。

2010年、活動の重点は

第1に 失業、貧困、格差とたたかう人びとと連帯するうたごえを起こし、平和のうちに働き、生きる思いを歌にして広げる。

第2に 「戦争も核兵器もない平和な世界を」のうたごえを長崎・広島、日本から響かせ、5月のNPT再検討会議の成功に向け、署名・派遣運動を成功させ、平和行進、世界大会につなげる。「基地のない平和で豊かな沖繩」の闘いに連帯のうたごえを起こす。

第3に 9条をまもり生かす運動の広がりの中で、九条の会とむすび、うたごえ、音楽九条の会をつくり、憲法の心を歌いひろげ、「改憲手法」（国民投票法）の凍結・廃止をめざす。

第4に 地方、産業別の祭典運動、合唱発表会運動を進展させ、被爆・戦後65周年、長崎での日本のうたごえ祭典を全国の連帯で成功させ

る。

第5に 以下の日常活動を進展させる

- ・人びとの願いや思いを歌った歌を創る
- ・創ったうたを歌い交わし、多くの人にとどける演奏・普及活動を活発にする

- ・歌の広がりをうたごえ新聞や協議会で結び、うたごえの組織を大きくする
- ・次代を担うリーダーづくりと学習・教育運動を活発にする

方針「人々のねがいを結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、みんなうたう会」を旺盛に展開し、「共に生きる町づくり・地域づくり」のうたごえを広げる。

全市区町村、わが町・わが暮らしに、世界の羅針盤、平和憲法・九条をまもりいかすうたごえを響かせる。

①「いつでもどこでもうたごえを」を合言葉に一人・合唱・器楽・和太鼓と民謡民舞：多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる。

- ・失業、貧困、格差とたたかう人びとと連帯するうたごえを国のすみずみから起こすとともに、特に「たたかう労働者と連帯するうたごえを意識的にすすめる」。

- ・サークル・合唱団、協議会で「うたごえ九条の会」をつくり、音楽家、音楽愛好家とともに「音楽・九条の会」をつくり、7443の地域、職場、分野別の「九条の会」にうたごえを届けながら、さらに運動を広げる。

- ・すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、全市区町村で「みんなうたう会」を計画を持って実践する。

- ②多くの人が「こぞって歌える」愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

・「労働者の使い捨ては許さない。新しい働くものの連帯の歌を創る」活動をひきつづき全国のサークル・合唱団で取り組む。

・うたを創り生まれた作品を歌い、「みんなできつくり歌う」運動を広げ、創り手を生み出し、創作活動と作品交流を活発にする。創作合宿の発展、創作講習会開催の計画を持ち、オリジナルコンサートを充実させる。生み出した作品を管理するライブラリーの立ち上げをめざす。

③歌う喜びを出発点に、いのちや音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を発展させる。

方針 ②合唱発表会を地方・産業別・全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせる。広く参加団体を呼びかけるとともに、開催の仕方、運営を工夫し、豊かな交流ができる合唱発表会づくりをめざす。

②合唱発表会参加団体を1300団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

③全国合唱発表会のありかたについて、ひきつづき、全国の知恵をあれこれに改善していく。

方針 ③地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

①うたごえを起こし、新たな発展をめざすとともに、「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域、都道府県、産業別、階層別祭典を活発にし、祭典運動の新たな前進をめざす。

②「2010年日本のうたごえ祭典＝長崎」を全国の連帯で成功させる。

被爆・戦後65周年・「核兵器のない世界を！ 長崎から」と発信する今年の祭典は、NPT再検討会議派遣・署名運動、平和行進、世界大会と連動させ、全国の連帯で成功させる。

③「2011年日本のうたごえ祭典＝ちば」開催の準備を進め、それ以降の祭典計画を持つ。

方針 ④歌の広がりをつたごえ新聞読者につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーナル」を確立する。

今生きる人々のねがい・想いを歌でつなぐうたごえ運動の魅力・歌の広がりをつたごえ新聞読者につなぎ、「うたごえ発ジャーナル」を一層輝かせる。

「読み・作り・広げる」活動を柱に、うた新フォーラムの全都道府県開催、うた新まつりを計画し、幅広く読者を迎える。

季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、運用を活発にし、加盟員は全員購読し、さらに広げる。

方針 ⑤「うたごえ」出版物をより多くの人にひろめる。

①すべての協議会加盟団体に事業担当を置き、事業普及活動を活発にすすめる。

②音楽センター出版物をはじめ、各うたごえ出版物の旺盛な普及活動を進める。

とくに、NPT再検討会議派遣・署名運動と結び、反核・平和歌集「歩いて行こう」を広範な人に広げ、早期1万部を達成する。

方針 ⑥演奏・創造を発展させ、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめる。また、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

それぞれのサークル・合唱団・協議会での教育を日常の練習や実践の中で行うことを重視するとともに系統的に各種講習会への参加を強める。演奏・創造活動を豊かに発展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめる、力にしていく。

①うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」を積極的に運用するなど、学習・教育運動を活発にし、次代を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

②各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。
今年、東・西日本合唱講習会に中日本合唱講習会3ブロックで開催する。

③日本のうたごえ祭典の歌って参加の活動を地域、ブロック、産業別、分野で起こし、合同企画等への参加を強め、創造的連帯活動を前進させる。

④指揮者・指導者ネットワークづくり等、教育システムの組織化をひきつづきすすめる。

方針 ㉞青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う青年をたくさん迎える。

①青年の要求に敏感に目を向け、仲間づくり、サークルづくりと団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

②「運動する力」「音楽する力」をつける「学びの場」を系統的につくる。

③青年学生部を充実させ、全国を視野に入れた青年のうたごえの連帯を強める。

④第4回青年のうたごえ祭典（愛知）を全国の連帯で成功させる。

方針 ㉟サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会

の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

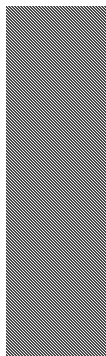
サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことをサークル・合唱団で討議し、目標持つて計画的にすすめる。

合唱発表会参加団体を1300団体に、加盟団体を500団体にし、うたごえ協議会のない都道府県のうたごえ協議会の確立目標を持つ。達成した最高時のうたごえ新聞読者の安定した確保と新しい読者をさらに広げる。

方針 ㊀うたごえ運動の中での「郷土のうたと踊り」の位置づけを高め活発にし、専門家との協力協同、全国講習会を充実させ、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

方針 ㊁世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる。

NPT再検討会議の成功、光州芸術祭はじめ、アジア、ラテンアメリカ、世界への交流の輪を広げる。



「核兵器という本当に持つてはいけなかったものを持つてしまった。持つてしまったものをどうなくすかが、人間の役割、責任」「核兵器廃絶を迎える日の新しい章が、あのオバマ大統領のプラハ演説から始ま

つたとすれば、その実現はこれからにかかっている。その『新たな平和の章』を市民と一緒に」と長崎田上富久市長。

そして長崎の『高校生平和大使・高校生一万人署名活動』の高校生たちは、

「同じ時代に生きているすべての人たちへ このこえを このこころを」とどけたくて つたえたくて

きょうもあしたも この一本のペンに
たくしたい

へいわ願う声を ナガサキのこころを」

とテーマソングを歌い、「私たちはビリョクだけどもリョクではありません」と10年余、世界に発信しつづけている。

広島の中学生から生まれた「ねがい」は世界45カ国に広がっている。未来を担う若者たちに力を得、若い力が輝く社会を手渡すために、2010年を、核兵器廃絶、平和のうちに暮らす社会への大きな転換点とするうたごえを国のすみずみに響かせていきたい。

◆2010年主な年間活動

①日本のうたごえ祭典＝長崎

10月15日(金)～17日(日)

②うたごえ新聞まつり

3月13日(土)～14日(日) 長崎・伊王島

③地方祭典・合唱発表会

地方合唱発表会は9月12日までに終了

祭典：北海道&医療(9/18～19函館)、九州(9/18～19

熊本)、長野(9/5)、国鉄(9/4～5仙台)

④産業別・階層別うたごえ祭典・交流会＝港湾(7/31京都)、教育(8/21～22岐阜)、青年(6/26～27愛知)、郵便(9/20大阪)、医療(9/18～19北海道・函館)、国鉄(9/4～5宮城)、電通(9/4～5東京)、自治体(東京)、保育(9/18東京)、私鉄(5/23大阪)。関東交流会(6/5～6千葉)東北交流会(6/26～27秋田)

⑤全国講習会

全国合唱指導・指揮講習会 6月18～20日、長野・松本

西日本合唱講習会 4月24～25日、福岡

東日本合唱講習会 4月17～18日、山形

中日本合唱講習会 5月22～23日、名古屋

東日本郷土講習会 4月24～25日

⑥3・1ビキニデー 2月27～3月1日、静岡

⑦原水爆禁止世界大会 8月4～6日、広島 8～9長崎

⑧第56回日本母親大会 8月28～29日、福島

⑨日本平和大会 11月 長崎・佐世保(予定)

⑩日本高齢者大会 9月13～14日、茨城